

# Nara Women's University

中国における日本古典文学-「万葉集の発明」の中国版をめぐって-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-01-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鄧,慶真 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/1382">http://hdl.handle.net/10935/1382</a>

## 中国における日本古典文学

### ——「万葉集の発明」の中国語版とめぐって——

鄧 慶 真

鄧慶真と申します。よろしくお願ひします。これから報告を始めますが、時間の関係でお手元にある原稿どおりにお話しできません。要点のみ申しあげますので、恐縮ですが後ほどお読みいただければ幸いです。

わたしは、昨年東京大学助教授の品田悦一氏の出版された『万葉集の発明』という本を、中国語に翻訳して出版しました。その「翻訳の動機」をまず紹介いたします。品田悦一氏の『万葉集の発明』を中国語に翻訳した理由は二つあります。その一つは、『万葉集』研究における伝統的視点とはかなり異なった新しい視点の紹介です。今一つは、直近の中国社会の現実を考えると、この本が取り扱ったテーマとその具体的内容を知らせることは有意義に思われたのでした。

次に「出版後の流布状況と反応」のところをご覧ください。今の中国では学術書は自費出版しなければなりませんし、出版後の販売を自分の責任でやらなければなりません。図書代理商たちのところへ持ち込みますと例外なく難色を示します。『万葉集の発明』を中国の読者に知らせる道は寄贈しか残されませんでした。友人、知人のほかに中国国内の大学図書館24軒、カナダの大学図書館3軒、そして広東省立図書館、広州市立図書館、カナダビクトリア市立図書館にも寄贈しました。それに加え、2005年3月に「中日文学研究国際シンポジウム」が広東外語外貿大学で開催された際、当該組織委員会に120冊を寄贈しました。以上は今までの『万葉集の発明』中国語版の行方です。

このように困難でしたがやはり読者の感想を知りたく思いまして、広東外語外貿大学東方言語学院の韋立院長先生のご協力の下、院長先生が担当される大学3年生の学生と、修士課程の院生合わせて39名に感想文を書いてもらいました。回収した39篇の感想文のなかの12篇は著書の論点に無関係なことを羅列しただけでここでは取りあげません。残りの27篇を解説しながら報告いたします。なお、彼らの文はもともと中国語でありまして、筆者が日本語に翻訳しました。その際、真意に沿うことを心がけたために直訳が多くなりまして読みにくい箇所があることをお許し願ひたいと思います。

27篇中、14篇は著者の研究態度と研究方法に言及し高く評価しています。新しい研究分野の開拓にふれたものは12篇です。

院生(1)は著者が文学を政治、権力、国家と階層など社会の枠組の中において有機体として再考し、原語、文学ないし文化の背後に隠される権力運用の仕組みを解明しようとする点を指摘して、次のようにいいます。

著者がこのように、全く新しい角度から鋭い目線で国民歌集としての古典歌集『万葉集』を見つめ直す。その試みは実に大した創見と挑戦だと思う。空気の如く当たり前のようなものであればあるほど、もしある人が前に出て疑問を投げ、或いは再考する必要があると言ったら、その人が受けるであろうプレッシャーが大きいだろう。著者はここで非常に緻密で、一部の隙もない実証的な研究で自分の論点を証明して見せた。

この院生は著者が受けるプレッシャーにもきちんと共感しています。翻訳中、原作に見られる大量引用を中国の読者がどう受け止めるかと心配したことがあります。学術書を訳す者としては、論拠を正確かつ十分にあげることが重要であるとわかっているのですが、一般読者には量的に多すぎるのではないかと思ったのです。こうしてアンケートを取ってみますと、確かに学生たちの感想文にはそのような指摘がありましたが、それはむしろ著者が調査に払った心血と研究に対する真摯な態度に対する敬意につながるものでした。この件では案ずるより産むが易いを実感しました。3年Aは次のようにいいます。

著者は『万葉集』中の作品を大量に引用し、本の説得力を増幅させると同時に、論点のために伏線を埋めておく。

実際、学生たちは本の内容をいかに理解したのでしょうか。ここで3年BとCはそれぞれ次のようにコメントをしています。3年Bはまず教育のもつ力にふれ、中日両国の相互理解について次のように述べます。

『万葉集の発明』は日本の学者が日本の古典文学について研究したものである。しかし角度を変えて眺めてみると、私に知識以外の、ある種精神的な強い力をも与えてくれた。中国と日本は一衣帯水の隣国である。文化面では相通うところが多く、両国間の相互交流と理解促進こそ、共に前進する有効な道である。

3年Cは、『万葉集の発明』を読む前と読んだ後の考えを次のように書き留めています。

純粋な文学研究には、私は昔から興味がなかった。特に古典文学に対しては、その時代遅れの文字と言語は現在の社会ではとくに廃棄されたし、心を打ち込んで研究する必要がないと思っていた。しかしこの本を読んで私ははっと悟った。古典文学の研究を通し、古代の歴史、社会、文化など各方面についての勉強が出来るだけでなく、歴史を鏡に是非の教訓を得、現代社会のために正しい道標を取得することが出来るのだ。

3年Dには日本に対する注目すべき感想が見られます。Dはなぜ『万葉集』のような「発明」が中国にないかについて、まず中国自身に対する反省を述べ、日本に対する感想を次のように展開しています。

もし「裏を返して見る」という観点から考えると、もっと面白いことが発見できるのではないか。中国に中国の「国民唐詩観」或いは「国民宋词観」などが存在しないのは、中国の古文化が広く深いからではなかろうか。膨大に多面的に蓄積されたその構造が、歴史の一つ一つのエッセンスに全民族の底力を支えるパワーを与えた。それ故、わざわざ何かを強調する必要がなく、よって、表向きの所謂「ナショナル・アイデンティティーが欠如する局面を打開する」文化運動も存在しなくて済んできた。一方、日本は古くから吸収者として受け入れる側であった。古くは国史である『日本書紀』を全篇漢文で書いた。新しくは文明開化後ドイツからビスマルク鉄血政策を鵜呑みした。これで日本の愛国者が大いに怒り、国民歌集観の誕生に繋がった。

しかし何故か私は「万葉人」の突然の出現に一種の「悪俗感」(原文)を感じる。つまり、日本の愛国者たちの、何かがあるとすぐその中にすべてを纏めようとする傾向である。品田氏がそれを「魅力的な言葉」と称したのは『万葉集』の大衆化を強調したためであろう。同じ理屈で、もし中国人が自分たちのことを「唐詩人(びと)」あるいは「宋词人(びと)」と称さなければ、日本人のロジックからいうと、国粋の大衆化を表せなくなるだろう。個人的な理解であるが、これは昔から日本に強い勢力を持つ文化に対する崇拜心理が存在することを違う側面から映し出したのだと思う。たとえ同一民族の内部においても、このような心理は人為的操作ができる。「万葉人」を以って『万葉集』大衆化を強調すると同時に、それに対する崇拜をも隠せない。

私は初めてこれを読んだとき、この学生は「万葉人」という言葉の概念をはたして正確に理解したのかとの疑問を抱きました。しかしもう少し注意を払って何回か読み直していくうちに、誤解に基づく議論だと簡単に切り捨てられないものを感じました。それを読んどのように感じるか人によって異なるでしょう。しかし、これが大学で日本語を専攻する一人の中国人学生が日本について抱いている理解であることは確かな事実です。ここで紹介する意味はあると考えます。

3年Dのように深く掘り下げる学生は全体的に見て少数です。3年Eの感想がその年齢層、あるいは中国の一般読者のなかではもっと普遍性をもつでしょう。その一部をここで紹介いたします。

しかし、感性的な角度から言えば、この本は著者が「あとがき」に記した心配通り、私のような四大生にとってさえ余りにも退屈である。ひどい言い方をすれば、我々の

ような人に見せる必要なんかないと思う。しかし、これは単に書き方の問題で、敢えてこの本の学術価値と思想価値を無闇に否定することはできない。(略) 日本近代思想の発展状況と問題の専門分野に疎く、そして飽きもせず用いられる本書の「引用論証」法は耐えがたく、私は第二章の真中あたりから読みつづけることを諦めた。にもかかわらず、この本についていくつかの感想がないわけではない。

一つに、この本は『万葉集』という日本古典の代表作を切り口とし、近代日本思想の発展の意思側面を論述した。我々はそれについての認識を深めた。著者が一人の日本人として、この如く冷静に、専門的に、且つ緻密に著作を仕上げたことに誠に頭を下げる。これは決して型通りのお世辞ではない。私にはそんなことを言う必要もないのである。この本の著者と同じ立場に立って一つの文化的現象を見つめる人は、私が今まで接した西洋の著作の中では決して珍しくない。しかし管見するところ、中国人が書いたものではこのように本を書く人は稀である。この点は、我々が学ぶべきところである。

この少し先では、Eは次のようにいっています。

両国は共通するところが多く、日本にあったものは当時の中国にもあった。今現在の日本に生き残って、「発明」され捧められているようなものは、今日の中国にも存在する。この二国に限らず、全世界の各国にも、夫々の民族が夫々自身の存在のために、約束せずとも「発明」をしている。このような認識は我々の今後の研究に多かれ少なかれ役立つであろう。

論にいくぶんの混乱が見られますが、一生懸命に理解しようとする姿勢が認められます。

最後に「中国における万葉研究」について申しあげます。感想文を提出した学生ですが、『万葉集』を完読した人は一人もいません。聞いたことがあるが読んだことがないという学生がほとんどです。ここでは『万葉集』の翻訳について取りあげたいと思います。

『万葉集』の中国語全訳は次のような二種があります。

1. 楊烈訳 『万葉集』(上・下)(湖南人民出版社 1984年7月)
2. 趙樂牲訳 『万葉集』(訳林出版社 2002年4月)

1の楊烈氏の翻訳方針として長歌を五言古詩、あるいは七言古詩に、短歌は五言絶句に訳す。旋頭歌は極めて少なく、ときには五言絶句、ときには七言絶句に訳しています。例えば巻3の272番歌の訳は次のようになります。以下、中国語で訳文を読みます。

四極山頭去、平原一望収、航行縫笠島、隱約無棚舟。

(四極山 打越え見れば 笠縫の 島傍ぎかくる 棚無し小船)

ご存じのように中国語で漢字を読む場合、漢字一つにつき音節一つです。復旦大学中国文学の教授である訳者の訳文は、古詩でありながら決して晦渋なものではなく、作詩の規則も守っています。ちなみに楊氏の『万葉集』訳は中国語で初めての全訳です。2の趙樂牲氏は直訳を翻訳の原則とし、現代口語にわかりやすい古代語彙を少し加え、本来の音数律を無視して脚韻、あるいは詞曲韻を用いました。趙氏の訳した同じく巻3の272番歌は次のようになります。

越過四極山、放眼看、舟行隱在笠縫島、小小剗木船。

『万葉集』の部分訳には次のような四つがあります。

1. 銭稻孫訳 『万葉集選』(日本学術振興会 1959年)
2. 銭稻孫訳 『万葉集精選』(中国友誼出版公司 1992年1月)
3. 沈策訳 『万葉集』(四平師範学院 1979年)
4. 李芒訳 『万葉集選 日本古代詩歌集』(人民文学出版社 1998年)

1と2は似たようなもので、古い版の詩経風訳に比べ、新版の『精選』には白話訳がつけられた歌も見られます。訳者の銭稻孫氏は多才な人で日本語の造詣が深い方です。詩経風の訳文は訳者が生存した時代ならではの形式でしょう。しかし、今日の一般読者、とくに若い読者にとってすこぶる難解といわざるを得ません。その白話訳は自由詩のスタイルです。巻1の7番歌の訳を見てみましょう。

之一 昔之日<sup>𠄎</sup>駕、<sup>𠄎</sup>在<sup>𠄎</sup>金野、<sup>𠄎</sup>彼薄華、<sup>𠄎</sup>我假舍、今我猶思、宇治之夜。

(秋の野の み草刈り葺き 宿れりし 宇治のみやこの 仮廬し思ほゆ)

「之一」はいわゆる詩経風の訳で、四角で囲んだ漢字と下線を引いた言葉は今日日常的に使っていません。一般人にとってわかりにくいものです。

之二 不由地想起当年、秋天野地里、臨時割草經營、盖起那宇治的行邸。

「之二」はいわゆる白話訳ですが、二重下線を引いた言葉の使い方は今日の使い方と考えますとわかりにくいものです。3と4は未見ですが、李芒氏の歌を五言七言に訳すべきだ

との主張が、氏の『采玉集』からうかがうことができます。

天地初分時、富士峻嶺懸。  
聖潔神瑞氣、高臨駿河湾。  
靈峰立広宇、仰望永威嚴。  
驕陽為其隠踪影、皓月為其避玉顔。  
白雲不去佇峰頂、瑞雪時而飄九天。  
後世永称頌、崇高富士山。

ご覧のとおりこの長歌の中国語訳は五言と七言の両方が見られます。

このような専門訳書のほか、研究書にも著者それぞれ独自の訳が見られます。そのような歌の訳は、著者の万葉歌の受容を示します。先ほどの李芒氏の『采玉集』は一例ですが、『日本和歌史』の著者彭恩華氏も中国古詩の五言七言が「五七五調」の和歌の翻訳に最適と考えます。例えば彼が訳した3459番歌が次のようになります。

為脱稻穀粒、双手皆皸裂、今宵会公子、執握定嘆息。  
(稲春けば 皸る我が手を 今宵もか 殿の稚子が 取りて嘆かむ)

ご覧のとおり五言です。詩歌の翻訳は文章のそれとは違い、正確さの他に韻律の問題も考慮しなければなりません。一部の中国人学者が和歌も詩歌類に含まれるため、中国読者の詩に対する習慣に従わなければ「詩味」が出ないと考え、「五七五調」に翻訳することを拒否しました。しかし、最近若手学者を中心に和歌を中国語の「五七五調」に翻訳する人が増えてきています。そのなかでは日本における研究経験をもつ人が目立ちます。例えば現在武漢大学で中国文学を教える石観海氏は、かつて日本の大学で教授をしていた経験があります。氏が翻訳した辰巳正明氏の『万葉集と中国文学』のなかの歌は「五七五調」です。それとは別に、茨城大学の教授である梁継国氏の訳も「五七五調」になっています。これを読んでみます。

君若赴京久、紅梅開後又迎柳、與誰一起遊？梅柳繁華三月節、願君織柳飾我頭。  
(君が行き もし久にあらば 梅柳 誰とともにか わが縵かむ)

『万葉集の発明』に引用された歌の場合、引用歌の出所が『万葉集』に限らず近代万葉風の歌もあるため、どれか一冊既成の訳本を使うことができませんでした。書中に引用された歌はすべて独自に翻訳したもので、「五七五調」にしました。理由はご存じのように、和歌が中国の古詩（漢詩）と根本的に違うところは、韻を踏まず、音数で並べられること

にあります。もし和歌をも漢詩に訳してしまえば、日本の和歌と日本人が書いた漢詩との違いは中国語訳では反映されないのです。中国の現代詩は自由形式を取っており、韻を踏みません。それがすでに広く認められ、受け入れられています。「五七五調」の形式に対する中国読者の受容も不可能ではないはずです。事実、「出版の流布状況と反応」で紹介した感想文のうち、11篇が翻訳の問題にふれており、「五七五調」の訳し方に反対する意見は一つもなく、むしろ賛同が多かったのです。学生Fが好きな訳の例としてあげたのは1418番歌です。

流水撃石跑、清泉边上薇蕨菜、茁茁発嫩芽、脚步輕輕人不知、春回大地萌生機。

(石走る 垂水の上の さわらびの 萌え出づる春に なりにけるかも)

周知のとおり、同じ意味を表す場合、中国語の音節数は日本語のそれより少ないわけです。そのため、同じ「五七五調」には、第4句に「脚步輕輕人不知」を足さなければなりません。この表現は中国文学では「春」に関連してよく用いられ、中国人には馴染み深いものです。春到来の雰囲気をつくり出すにふさわしいと考えたのです。王曉平氏がいうように、和歌を現代詩に訳す試みをしてもいいのではないのでしょうか。「問題は只その出来栄が良いか否か」である。

その他に、『万葉集』という名が題に見える日本からの学術書の翻訳、中国人学者が書いた『万葉集』関連の単行本、および論文を以下に挙げておきましたが、時間の関係で詳しいことは省略いたします。本報告はここまでにいたします。

1. 中西進著 王曉波訳『水边的婚恋 万葉集與中国文学』  
(四川人民出版社 1995年)
2. 辰巳正明著 石観海訳『万葉集與中国文学』(武漢出版社 1997年)
3. 松浦友久著 加藤阿幸・陸慶和訳『日中詩歌比較叢稿 從『万葉集』的書名談起』  
(民族出版社 2002年)
4. 梁繼国『万葉和歌新探 漢文虚詞在万葉和歌中的受容及其訓読意義』  
(蘇州大学出版社 1994年)
5. 馬駿『万葉集「和習」問題研究』(知識産権出版社 2004年)
6. 趙樂姪「高橋虫麻呂論—『万葉集』研究之一」(『東北亞論壇』第2期 1994年)
7. 林林「關於美・愛・死的歌—讀『万葉集』札記」  
(『中国比較文学』第10期 1995年)
8. 尤海燕「古代日本人生死觀的轉換及『飛花落葉』美意識的形成」  
(『外国文学研究』第3期 1999年)
9. 蕭霞「論「春秋競憐判歌」的芸術表現—『万葉集』第一卷第十六首歌的研究與欣賞」

- (『文史哲』第2期 2001年)
10. 紀太平「從日本古代短歌音韻特点及其漢訳看中日文化交融」  
(『外国文学研究』2002年2月)
  11. 吳雨平「『万葉集』誕生的中国文化背景」  
(塩城師範学院学報〔人文社会科学版〕第1期 2003年)
  12. 宿久高「日本古典詩歌の種類與形式」(『日語学習與研究』第3期 2003年)
  13. 邱紫華「日本和歌的美学特徴」(『華中師範大学学報』第2期 2004年)
  14. 王曉平「敦煌文学文献與『万葉集』漢文考証」  
(『中国文化研究』第4期 2004年)
  15. 任健「旅人與憶良—論万葉歌人的人生觀」(『日本学習與研究』増刊 2004年)

ご静聴ありがとうございました。

#### 参考文献

- 品田悦一著 鄧慶真訳『万葉集の発明』(香港教育出版社 2004年10月)  
文潔若『文潔若散文』(「我所知道的錢稻孫」華夏出版社 1999年1月)  
李芒『采玉集』(訳林出版社 2000年5月)  
彭恩華『日本和歌史』(学林出版社 第2版 2004年)  
川本皓嗣著 王曉平等訳『日本詩歌的傳統—七與五的詩学』  
(「訳者序」訳林出版社2004年3月。原文:「問題只是在於訳得好不好」。)